

Blue Archive FANBOOK

黒ねこ作

Illustr 桜庭友紀

U&C MISSION REPORT

始動：The First Ignition

Blue Archive FANBOOK

C&C MISSION REPORT

— 始動 : The First Ignition —

黒ねこ作

007 プロローグ

追憶

013 Mission Report 1

二人の異端児

039 Mission Report 2

協力者

063 Mission Report 3

メイドの流儀

103 Mission Report 4

コールサインダブルオー

191 エピローグ

現在

198 あとがき

Cleaning & Clearing

A covert organization operating directly under Seminar, the Student Council of Millennium Science School.

Known as "C&C," they are Millennium's premier agents, sworn to serve the academy.

C O N T E N T S



美甘ネル

ミレニアムサイエンススクール 3年生
Cleaning&Clearingのリーダーで、
コールサインは00(ダブルオー)。

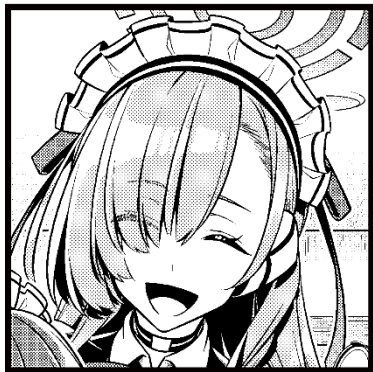
約束された勝利の象徴と謳われる、
ミレニアム最強のエージェント。

1年生の頃は喧嘩ばかりの問題児だった。
一時は逮捕寸前となるも、調月リオに腕を
買われて、特赦を条件に捜査へ協力する。

調月リオ

ミレニアムサイエンススクール3年生。
生徒会〈セミナー〉を率いる現会長。
工学分野を中心に並外れた才覚を持ち、
最大多数の最大幸福を掲げる合理主義者。
C&Cの創設者で学園を現在離れている。
1年生の頃にセミナー役員へ抜擢され、
先代の会長から監査役を一任された。
学園内の連続失踪事件を捜査している。





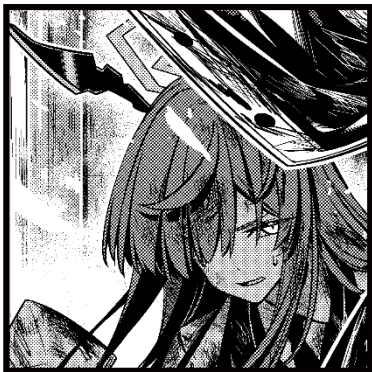
一之瀬アスナ

ミレニアムサイエンススクール 3年生
Cleaning&Clearingの次席で、
コールサインは01(ゼロワン)。

天真爛漫かつ自由奔放な明るい性格で、
人並外れた天性の直感力を備えている。
1年生の頃から社交性が高く、ネルにも
興味があった。調月リオに才覚を買われ、
面白そうなので事件捜査に協力している。

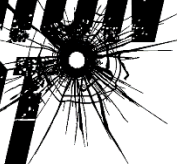
白石ウタハ

ミレニアムサイエンススクール3年生。
エンジニア部所属で現在の部長。
マイスターの称号を持つ工学系の天才で、
多種多様な発明を続ける職人肌の発明家。
1年生の頃はマイスターの次期候補者に
名前が挙がるほど有望な一部員だった。
学園から蒸発した行方不明者の一人。



イラストレーション / 桜庭友紀

C&C MISSION REPORT



始動：The First Ignition

プロローグ

【追憶】

目の前にきらめきが広がっている。

キヴォトスの夜空に輝く星々の光よりも眩しく、超高層ビルがひしめくように屹立した近未来的な巨大都市^{メガロポリス}。街灯や窓から漏れた数多の明かりで彩られる壮麗な夜景だ。

ミレニアムサイエンススクールの都心部は眠ることを知らない。

三大学園の一角にも数えられる同校は、先端技術に惜しみなく力を注ぎ、近年で急速な成長を遂げた。学園の躍進に伴い、自治区の発展も目まぐるしい勢いで進んでいる。

美甘ネルは大意した。辟易とした面持ちでぼやく。

「つたく、あたしを待たせるとは呆れたもんだぜ」

摩天楼に等しい校舎「ミレニアムタワー」の屋上。常人なら立ちすくむ縁^{へリ}に腰かけて、ミルクティーの缶を片手に夜風を浴びる。仕事前のブレークタイム——ではなく、目標^{ターゲット}の確認による予定外の小休止。そして、ミレニアムの生徒会「セミナー」の連絡待ちだ。

見慣れた夜景を眺める他に今はやることはない。

「便利にコキ使いやがって。雇われも楽じゃねえなあ」

最先端科学に溢れるミレニアムでは様々な事件が起きる。実験の失敗による爆発事故や

ペットロボットの暴走は珍しくもないが、表沙汰になると厄介な案件も少なくない。

だからこそ、ミレニアムには『Cleaning&Clearing』クリーニング アンド クリアリングが存在する。

——秘密組織C&C。セミナーの依頼で厄介事を片づけるエージェント集団だ。

普段からメイド服を着用するメンバー全員が荒事のプロ。ミレニアムでトップクラスの戦闘力を持ち、美甘ネルを部長に据えた「メイド部」として表向きは通っている。

今晩の仕事は難しくない。掃除ロボットの改造ソフトをブラックマーケットでばら撒く不届き者を掃除する。セミナーの待ったがなければ、とっくに片づけて一件落着だった。

スカジャンの右ポケットでスマートフォンが震える。

「やっとかよ」

右耳に指を当てた。ハンズフリーのイヤホン型通信機で着信を受ける。

「おいコラ！ いつまで待たせるつもりだ！」

『待たせた覚えはないのだけど……』

「は？」

思わず間の抜けた声が出た。引っ張り出したスマホの画面には、忘れていた直通番号が表示されている。セミナー監査役室。この番号を知る関係者も現在は数少ない。

タイピングの音が電話口から微かに聞こえる。

『取り込み中のようね。掛け直すわ』

「ふざけんな。用件も言わずに切るんじゃないよ」

漏らした吐息が風に流される。安堵と呆れの入り混じる溜息だった。

「一ヶ月ぶりか？ あたしに話があるんだろ、リオ」

この番号をかつて教えた張本人——調月リオは短く肯定した。

『ええ。あまり時間は取らせないわ』

「んなこと、心配してねーよ。この番号が生きてたのは驚いたけどな」

『^{バックアップ}予備回線の一つよ。安全な連絡手段として残しておいたの』

「へえ。んで？ やっと戻る気になったのか？」

『それは……』

リオが言葉を濁した。わずかな沈黙を経て、絞り出すように続ける。

『……あの子達に合わせる顔がない。私にその資格はないわ』

「お前まだそんなこと言ってるのかよ。セミナーのあいづらが心配してるし、アリスにも詫びを入れて許してくれたんだろ？ なら、お前の資格とやらも十分じゃねえの？」

『彼女が許しているとしても……私がエリドゥで犯した過ちは消えないわ』

「んっつによお！ 本っ当に面倒だな！」

要塞都市エリドゥを巡る事件は、リオの心に罪悪感として深く刻まれている。

キヴオトスの危機を解決した今もそれは変わらない。生徒会長職の辞表と手紙を残して行方を眩ませた日から今日まで、ミレニアムには帰還せず未だ独自で活動していた。

しゅんとした声でリオが言い添えた。

『……ごめんなさい。困らせるつもりはないの』

「言われなくても分かってたんだよ。んなことは……」

バリバリと後ろ頭を搔いて、ネルは長大息する。

「ま、お前の問題にごちゃごちゃ言っても仕方ねえか。けどな、お前を心配して待つてるヤツらもいるんだぜ。あんまりつまんねえ意地ばっか張るのも程々にしとけよ」

『誤解よ。私は意地を張っているわけでは……』

「他に何があるんだよ。ったく、昔っからそうだよな」

『そうかしら？』

「一度決めると梃子でも動かねえだろ。忘れたのか？」

大都市の明かりが反射する夜空を仰ぐ。月日を経ても頭上の景色は変わらない。

「あたしをエージェントに引っ張り込んだときだよ」

破壊衝動に身を任せて喧嘩に明け暮れた一年生の時期だ。

学園どころか街にも居場所がない。スカジャンの格好だけで、どこへ行っても色眼鏡で見られる。わざわざ寄って来るのはアウトローを気取る不良だけだ。仲間と呼べるような友達もなく、短気な性格も相まって、暴力と硝煙にまみれる空虚な日々を過ごした。

リオとの出会いはちょうどその頃だ。
最悪の顔合わせだった。ただし後悔はしていない。

——『ネル、貴女には力がある。力ある者は相応の責任を負うべきよ』

今でもはつきりと覚えている。あの一言が虚しさを変えるきっかけとなった。

ネルは思い返して苦笑を滲ませる。

「お前に協力するか、矯正局に入るか。そうだったよな？」

『強引な方法だったわね。謝るわ』

「はっ、今さらだろ」

一匹狼の問題児とセミナーの監査役。手を組んだ契機は一つの事件にある。
学園生徒の連続失踪事件。それが全ての始まりだった。

C&C MISSION REPORT



始動:The First Ignition

Mission Report 1

【二人の異端児】

——二年前。

キヴォトスで非合法的取引を大っぴらにできる街がある。

不良、犯罪者、悪徳業者——商売をする者から訪れる買い手まで脛に傷がある者ばかり。

ヒューマノイドの武装警備員^{アラベイトセキュリティ}“マーケットガード”が我が物顔で闊歩する中、金を払えば

大抵のモノは手に入る。キヴォトスの法律は通じない。この街では金と力が物を言う。

ブラックマーケット。悪徳と欲望が渦巻く無法者の街^{アウトロー}だ。

薄汚れた街角に五階建ての雑居ビルがある。真つ当な商売を営んでいる店舗や事務所は一つもない。最上階の消費者金融“ハッピーファイナンス”も例外ではなかった。

初夏の夕暮れどき。事務所の床に蹴破られたアルミドアが倒れた。

潤^{うるみしゅ}朱髪の少女がドア口にいる。沈黙は一瞬だった。「なんだテメェ!!」「カチコミか！

舐めた真似しやがって!」「ぶっ殺せ!」と社員の男達が武器を手に立ち上がる。

美甘ネルは一同を睥睨^{へいげい}した。スカジャンのポケットから右手を抜く。

「おい、親玉はてめえか?」

事務所の最奥、目を丸くした四角顔の社長を指差した。

ハイブランドのスーツで恰幅の良い身体を包み、高価な指輪を金属ボディの手に幾つも付けている。ようやく状況を察したらしく、慌てて腰を浮かせた社長が命じる。

「か、片づけろ！ 今すぐ！」

口火を切ったのはネルだった。ほんの一息で間合いを喰らうと、アンドロイドの男達が驚愕を口にするよりも早く、二挺のサブマシンガンを後ろ腰から抜いて発砲する。

黒スーツの胸板から鮮血オイルを飛沫かせ、四人が奇つ怪なステップを踏んで崩れ落ちた。

SIG・MPX——彼女が「ツインドラゴン」と呼ぶ二挺は、黄金の龍と桜の文様を描くカスタム仕様。制服のシャツの上から羽織ったスカジャンの絵柄と同じであった。

男達は二十人くらいか。軽快な銃声に合わせて次々と倒されてゆく。

ショットガンを連射する男の眉間をぶち抜く。取り落としたそれを蹴り上げて、右から迫ったナイフ男に一発お見舞いする。吹っ飛んだナイフ男はデスクを薙ぎ倒して動かなくなった。パーティションに三発を撃ち込んで、遮蔽物とする四名を一気に始末する。

弾切れのショットガンを放った。残りは十人ほどだ。

大男が鞘から刀を抜く。ネルの背後から勢いよく斬りかかった。

「クソガキがッ!! 往生しろやあ！」

裂帛の気合いで落とした白刃が、鮮やかな火花を散らした。大男が両目を瞠る。

ネルは逆さに掲げた右手の銃で刃を止めている。ハンドガードの付け根で受けたのだ。刀身を跳ね返し、不機嫌な顔で振り返る。紅い双眸が大男を射貫いた。

「あたしをクソガキって言ったよな？」

両膝を左手の一挺で撃ち抜く。絶叫した大男が跪くように頽れた。

「クソ生意気なチビが！ 今すぐぶっ殺し——」

側頭部に無数の風穴が開く。貫通した弾丸は床を穿ち、大男は前のめりに顔から倒れた。赤銅色の潤滑油が水溜まりのごとく広がる。目の当たりにした男達が激昂した。

ベテランらしき男が壁際で怒鳴った。

「あのチビ！ 生きて帰、ごぶっ……」

鳩尾に凶刃が突き刺さる。ネルの投擲した大男の刀だ。切っ先は背中を貫いて後ろ壁を深々と穿っていた。昆虫標本のごとく、ベテラン男は壁に刺し留められて沈黙する。

九人の男達は弾かれたように発砲した。

「クソ！ 冗談じゃねえぞ！」

ネルを狙って銃を撃ちまくった。作戦や連携はない。本能的な恐怖に支配された男達は冷静さを失っている。とにかく銃弾をばら撒いて敵を倒そうと躍起になっていた。

ジリ貧な部下達を尻目に、社長は床を這って移動する。

（何だあのガキは!? ふざけるな!）

ブラックマーケットでも荒事に慣れた男達を、赤子の手を捻るようにあっさりと倒してかすり傷一つ負っていない。まるで一切を破壊して吹き荒れる人間サイズの暴風だ。

理由も目的も不明。ライバル組織の鉄砲玉^{ヒットマン}か否かも判らない。

事務所の出入り口は一つだけだ。銃声が聞こえている間は恐らく気づかれないだろう。あと少しで迫り着く。ビジネスと同じだ。ゆっくりと慎重に。そして確実に――。

眼前に銃弾がめり込む。恐る恐る振り返った社長の鼻先に銃口があった。

「おいコラ、てめえが親玉だろ。逃げようとしてんじゃないよ」

「ひ、人違いだ。私は……」

「ふざけてんのか!!」

片手撃ちで無造作に左を撃つ。デスクの真横で飛沫が上がった。隠れて隙を窺っていた男が崩れ落ちる。銃声はいつの間にか止んでいた。最後の一人だったのだ。

ネルは鼻を鳴らした。

「これで全部か? ったく、手間かけさせやがって……」

「お前は誰だ! 何が目的なんだ!？」

「しらばっくれてんじやねえぞ！」

鼻っ面を蹴り上げる。ひび割れた顔で悶絶する社長に告げた。

「あたしに子飼いのチンピラをけしかけたのはてめえだろうが！ このあたしにケンカを売ったんだ、ぶっ殺される覚悟できてんだろうなあっ!?」

「お、落ち着け！ 誤解だ！」

じりじりと後退る社長が、液晶モジュールの顔面に怯えた表情を浮かべる。

「私は借金の回収を指示したんだ！ 襲えなんて指示はしてない！ うちが貸してやった金の取り立てだけだ！ まあ借りたガキは、お前ぐらいのチビだったが……」

「ああ!? もういっぺん言ってみろ！」

「だから借りたのは、お前みたいなチビのガキ……」

ハツとした顔で社長が口を嚙む。脱兎のごとく逃げ出すも遅すぎた。

ネルの怒声が響き渡る。

「そんなに殺されてえのか！ だったら望み通りぶっ殺してやる!!」

ツインドラゴンが火を噴く。二挺のフルオート射撃だった。集中砲火を背中から浴びた社長は、吐き出される弾丸に殴打されながら、不気味なダンスを披露して倒れる。

硝煙の燦る銃口を下ろして吐き捨てた。

「誰がチビだ！ ふざけんな！」

ガラスの四散した窓から吹き込んだ風が床の埃をさらう。わずか五分足らずでハッピーファインサンスの事務所は壊滅した。最早、弾痕と残骸だらけで見る影もない。

蜂の巣にされた社長も含めて、そこかしこに転がる男達はぴくりとも動かなかった。物言わぬ死体も同然だがまだ生きている。重傷と激痛のショックで気絶しているのだ。

キヴォトスの住人はわりと頑丈だが、意識不明の状態で喋らせるには無理がある。

肝心な話は聞けず終い。舌打ちが漏れた。

「……ちっ。またやっちまった」

頭に血が上ると抑えがきかなくなる。短気な性格の悪癖だ。

ミレニアムサイエンススクールの入学から二ヶ月。この格好と気性の荒さも相まって、校内でも今やすっかり浮いている。自分から群れたいとは思わなかった。だからといって露骨に避けられるのも不愉快だった。腫れ物に触るような態度が心底気に食わない。

大半が遠巻きにする一方、喧嘩を売りにくるバカもいた。

ミレニアムの生徒だけではない。無法者を気取った他校の不良生徒もいる。通学途中の襲撃など日常茶飯事だ。ぶらつく街中で喧嘩を吹っかけられた経験も呆れるほど多い。

一度の揉め事が呼び水となり、喧嘩に明け暮れる日々である。

最近、特にしつこく付け狙ってくる不良グループがいた。

俗に「スケバン」と呼ばれている連中で面識は当然なかった。彼女ら曰く、仲間の報復も兼ねた仕事らしい。身に覚えは欠片もないが、うんざりするほど執拗な襲撃だった。

降りかかる火の粉は払うしかない。襲ってきた全員を返り討ちにしてから、リーダーをぶん殴って黒幕を吐かせた。結果辿り着いたのが、このヤミ金融の事務所であつた。

ネルは溜息をつく。二挺のマガジンを交換した。

「あいつら適当ぬかしやがって。見つけたらぶっ飛ばしてやる」

用件は済んだと踵を返したときだ。

窓の外から投げ込まれた円筒形の物体——閃光手榴弾スタングレネードが転がって壁にぶつかる。ネルは右腕で目元を庇う。炸裂は一瞬だ。強烈な閃光と耳を劈くような爆音に塗り潰された。

武装した集団がなだれ込む。懸垂降下ラベリングした数名が残った窓ガラスを蹴破って侵入する。制帽の一团がドア口から一気に突入した。丸い防護盾ライオットシールドと銃を構えて取り囲む。

耳鳴りに顔を顰めながら、ネルは相手の装備で理解した。

「ヴァルキューレの連中か」

ポリカーボネートの盾に「VALKYRIE」と「K・S・P・D」の頭文字がある。

キヴォトスで唯一の警察機関「ヴァルキューレ警察学校」だ。各学園の主要な自治区に

拠点を構える同校は、法の番人として常日頃から治安維持活動を担っている。

犬耳の少女が包囲の一角から自動拳銃を向けた。

「動くな！ ヴアルキューレ公安局だ」

きちつと着込んだ制服とポリスジャケット。ショートカットの金髪の分け目から覗いた眼光は獵犬のごとく鋭い。同校の制式拳銃を油断なく構え、険しい顔つきで続ける。

「武器を捨て、大人しく投降しろ！」

ネルは鼻で笑う。お手本通りの警告で面白みもない。

「珍しいじゃねえか。お前らがこんな場所に出張つてくるとはなあ」

ブラックマーケットは無法者の巢窟で坩堝だ。だからヴァルキューレも手を出さない。犯罪の温床だと知りながら、迂闊に踏み込めば泥沼になると理解しているからだ。

二挺のグリップを握り直した瞬間、弾丸が左頬を擦った。

「動くな。そう言ったはずだ」

「てめえ……」

一睨みするも公安局の少女は動じない。逆に睨み返してきた。ブラックマーケットまで入り込んで来るだけはある。怯んだ周りの連中よりも遙かに肝の据わった刑事だ。

「抵抗は無駄だ。投降しろ」

「ああ？ 舐めたこと言ってるんじゃないよ！」

空気がひりつく。包囲する局員達の表情にも緊張が走る。

「理解に苦しむわね。投降を言葉で促すために包囲したの？」

一触即発の睨み合いに水を差すひと言だった。事務所のドア口に視線が集まる。
長身の少女がタブレット端末を左手に立っていた。

「時間の浪費よ。合理的とは言えないわ」

喪服めいたブレザーの制服姿にタートルネックの白いシャツ。ストッキングで覆われた
右腿にサイホルスターを付けている。腰まである黒髪を揺らして一同に尋ねた。

「責任者は？ 話があるのだけれど」

「止まれ！ 勝手に入るな！」

犬耳の少女が怒鳴る。すると「カンナ！」と一人の局員が慌てて駆け寄った。
「何をやってるんだ！ 一般市民を現場に入れるな！」

「実はそれが……」

耳打ちされた犬耳の少女——尾刈カンナは苦り切った表情を浮かべる。

「ミレニアムの生徒会？」「冗談じゃない」

眉間にシワを寄せて闖入者へと向き直る。
ちんにゆうしや



「公安局の尾刈カンナです。失礼ですが、あなたは？」

「調月リオ。セミナーの監査役よ」

タブレットの画面に生徒手帳を表示させ、冷然とした面持ちで告げた。

「美甘ネルを引渡しなさい。ミレニアムの正式な要請よ」

「お言葉ですが、彼女は我々が追う事件の被疑者だ。引渡すことはできません」

包囲する局員達からも賛同の声が上がる。

「貴女の上司と話をつけてあるわ。確認してもらえるかしら？」

「局長と？」

ジャケットのポケットが震える。カンナは取り出したスマホを耳に当てた。

「局長。はい、目の前にいます。……待ってください。承服できません」

ネルは怪訝な面持ちでリオを睨む。

「おい。何のつもりだ」

「政治的な判断よ。セミナーの意向とを考えてもらって構わないわ」

彼女の怜悯な表情から真意は読み取れない。

カンナが長大息する。

「……ご命令とあらば従います。はい、失礼します」

ポケットにスマホをしまうと、

「銃を下ろすんだ。そのまま行かせろ」

苦虫を噛み潰したような顔で指示した。

局員達が「ふざけるな!」「こいつを逃がすのか!」と詰め寄る。

「これは局長の命令だ。わかっているだろう!」

ぴしゃりと一喝して黙らせる。口にした本人が最も不服そうな表情をしていた。

リオに視線を投げる。

「他には?」

「ご苦労さま。協力に感謝するわ」

周囲の反感を平然と受け流して背を向ける。

カンナがネルを見た。さっさと出て行け、とドア口に向かって顎をしゃくる。

「ちっ……」

後ろ腰に二挺を収めて、リオの後を追う。視線が全身に突き刺さった。冷ややかな侮蔑と明確な敵意だ。四方八方から浴びせられる不快感に苛立ちながら事務所を出る。

ネルの背中に向けて、局員の誰かが罵倒を吐き捨てた。

「アウトロー気取りの野良犬が!」

「説明しろ。どうして助けた？」

ネルはボックス席のソファで対面のリオを睨む。

雑居ビルを出てすぐに横付けされた黒のセダンに乗るよう指示された。

リオが乗りつけたセミナーの公用車だ。ミレニアムタワーに連行かと思いきや、彼女の設定したナビの目的地は、学園から二〇キロも離れた街外れのダイナーだった。

二十一時を回っている現在、レトロな内装の店内に残る客は疎らだ。自動人形オートマトンが主流のミレニアムでは珍しく、カウンターの裏で談笑する二人の店員は犬顔の獣人である。

リオはコーヒークップを手を答えた。

「貴女が必要だからよ」

「ふざけんな！ あたしをからかってんのか!？」

「事実よ。他に理由はないわ」

無表情でカップにスティックシュガーを入れて口をつける。

ネルは鼻を鳴らした。

(……読めねえな。何が狙いだ?)

調月リオはクラスメイトだ。名前と顔は知っていたが、お互いに面と向かって喋るのは初めてだった。他人とつるまなくても、クラスで飛び交う噂は勝手に聞こえてくる。

入試の成績はぶっちぎりのトップ。セミナーから入学早々にスカウトされたエリートで、ずば抜けた才覚を見抜いたセミナーの会長が、自分から声をかけたとも囁かれている。

誰もが認める天才の異端児。腫れ物扱いの問題児とは雲泥の差だ。

「貴女を調べさせてもらったわ」

リオがタブレット端末の画面に目を落とした。

「驚異的な身体能力^{フイジカル}ね。喧嘩は褒められた行為ではないけれど、あらゆる不利な状況からほぼ無傷で勝利している。規格外な立ち回りは目を見張るものがあるわ」

「当たり前だろ。相手が弱すぎるんだよ」

「直情型で短気な性格、短絡的な考え方に寄っているわね。社交性は極めて悪く、協調性に問題を抱える。目立った交友関係はゼロ。友好的な関係を築くのは苦手なようね」

「おい、喧嘩売ってんのかこら? ぶっ飛ばすぞ?」

「気を悪くしたのなら謝るわ。でも——」

悪びれた様子もなく、リオは画面から顔を上げる。

「だからこそ信用できると判断したのよ」

「はあ？」

気の抜けた声が漏れた。まるで話が見えてこない。

「神隠し現象の噂を知っているかしら？」

「ああ？ それがなんだよ」

学園に流れる奇妙な噂話だ。シチュエーションが話し手によっても異なるが、被害者は学内で蒸発して必ず行方不明となる。目撃者はなく、二度と見つかることもない。

——原因究明も不能な怪現象。だから「神隠し現象」と呼ばれている。

ミレニアムは生徒を大量に抱えるマンモス校だ。行方不明者は何名いるのか？ どの誰が消えたのか？ 大勢の口にする「真実」は、具体性がなく総じて憶測の域を出ない。

リオがテーブルにカップを置いた。

「この写真を見てちょうだい」

指先で操作したタブレットの画面をネルに向ける。顔写真のリストだった。生徒手帳の登録写真だろう。ざっと数えて二十枚強はある。一枚ずつ拡大しながら切り替えた。

「三ヶ月で二十七名も行方不明になっているわ」

「へえ、そりや大変だな」

他人事として眺めつつ、最後の一枚がふと目に留まる。

「ん？ こいつはどっかで見たな」

セミロングの髪と瞳は紫陽花のような淡い紫色だった。頭の左右に浮遊するデバイスが人工のツノを彷彿とさせる。白衣じみたジャケットの下に濃紺のセーターを着ていた。

「私達のクラスメイトよ。貴女も教室で会っているわ」

「ああ……そう言われりや見覚えがあるな」

「白石ウタハ。エンジニア部の部員よ。マイスターの次期候補に名前が挙がる期待の星と言ったところね。二週間前、彼女は倉庫に行ったまま行方不明となっているわ」

エンジニア部はトップクラスの実績を誇る部活だ。ハードウェア面の技術力で右に出る存在はなく、さらに「マイスター」の称号を持つ生粋の天才達が所属していた。

彼女達の存在は大きい。学園施設の機器や装備品は当然ながら、キヴォトスに流通する大ヒット商品も数多く発明している。学園に支払われる特許使用料は莫大であった。

リオは真剣な表情で続ける。

「これは連続失踪事件よ。ただ、事件性を証明できる決定的な証拠は、今のところ限りなく少ないわね。目撃者はゼロ。監視カメラの記録にも不審な点は見当たらなかったわ……」
ネルは苛立ちを露わに睨める。これ見よがしな溜息をついた。

「んで？ あたしと何の関係があるんだよ」

「貴女を監査役室のエージェントに任命するわ。捜査へ協力しなさい」

「はぁ!? ふざけてんのか!」

「ふざけてないわ。貴女の力を借りることが最も合理的と判断したのよ」

啞然としたネルを見据えて、リオは澄ました顔で続ける。

「事件の早期解決には協力者が必要よ。エージェントの適正と良心を兼ね備えた生徒で、セミナーにしがらみがなく、他の部活にも入っていないこと。条件に合う候補者を調べて貴女に行き着いた。だから、身柄を引き取ったの。納得できたかしら?」

「できるわけねえだろバカ!!」

激怒した勢いで腰を浮かせ、ネルは青筋を立てて捲し立てる。

「あたしに恩を売ったつもりか？ 自分で首を突っ込んできたくせに、勝手な都合ばっか並べ立てやがって！ ふざけんじゃねえぞ！ お前は何様のつもりだゴラ!」

「セミナーの監査役だけれど……」

「ああ!? ぶっ殺すぞ!」

「そ、そんなに怒鳴らないでちょうだい……お店にも迷惑よ……」

たじたじといった様子で縮こまるリオ。心なしか等身まで縮んでいるように見えるのは

気のせいだろうか。怒鳴り声を不審に思ったのか、店員達もこちらを注視している。

バリバリと後ろ頭を搔いたネルが座り直した。

「ちっ……わーったよ。けどな、お前の話が事実なら保安部が動いてんだろ」

学園の警備や防諜は「保安部」が担っている。エンジニア部が日の当たる花形ならば、保安部は裏方に徹する影だ。学園の安全と機密を守る役割を持つ保安組織である。

保安部はセミナーの委託で活動している。二十名を超える連続失踪となれば、保安部の信用や沽券に関わる。セミナーの依頼を待たずに独自で捜査していても不思議はない。

リオは表情を曇らせた。

「保安部に期待はできないわ。取り付く島もなかったもの」

「あん？ どういう意味だよ？」

「捜査要請を拒否されたわ。与太話に付き合う暇はないそうよ」

「お前の頼み方が気に食わなかったんじゃないかねえの？」

「違うわ。セミナーの要請をそんな理由で拒否できるわけないでしょう。誰かの恣意的な迷惑がはたらいっているのよ。保安部を動かしたくない誰かの圧力でしょうね」

タブレットを操作して画面を切り替えた。折れ線グラフと数字の一覧を表示させる。

「セミナーで管理する学園口座の入金記録よ。ここ数ヶ月、ある投資会社から使途不明の

大金が流れ込んでいるの。行方不明者が出る前日に必ず振り込まれているわ」

「だからなんだよ」

「犯罪は利益を得る者がいるから起きるものよ。この大金が失踪を手引きする報酬なら、学園の内部から組織ぐるみで加担している共犯者がいるわ」

「そんで？ お前が一人で捜査してんのか？」

「ええ。エンジニア部の依頼で始めたのだけれど……この事態は想定より遙かに深刻よ。保安部の件を踏まえると、内部の捜査妨害や圧力も無視できないわ。だから——」

「ハッ。期待してるところ悪いけどな」

リオの言葉を遮って立ち上がる。苛立ちを吐き捨てた。

「お断りだバカ。あたしに厄介事を押しつけるんじゃないやねえよ」

ヴァルキューレとの仲裁を頼んだ覚えはない。彼女が勝手に割り込んで進めたことだ。見返りに協力しろと言われたところで、こちらが面倒事に付き合う義理はなかった。

リオが目を瞑る。静かな声色で告げた。

「ネル、貴女には力がある。力ある者は相応の責任を負うべきよ」

ボックス席を出ようとしたネルが、ギリッと奥歯を噛みしめた。振り返りざまにリオの襟首を掴んで対面から無理やり引き寄せる。彼女の怜悯な顔を鋭い双眸で凄んだ。

「……お前に何がわかるんだよ。言ってみろ、あたしの何がわかる?」

「わからないわ。だから先に言っておくわね」

ネルの瞳を真っ直ぐに見据えて、決然とした面持ちで述べる。

「私の一存で貴女の身柄を引き取ると決めた。セミナーの意向は関係ないわ。この判断が誤りだと確信したら、ヴァルキューレの引き渡し要請に応じるつもりよ」

「あたしをハメやがったな?」

「騙すつもりはないわ。合理性を踏まえた結果よ」

ぬけぬけと言つてのけると、ネルの手をそつと除ける。

「私に協力するか、矯正局に入るか。貴女の実択肢は二つよ」

「バカにしてんのか!? ふざけんじゃねえぞ!」

リオがタブレットの画面を指先で操作する。

「協力してくれたら特赦を約束するわ。悪い話ではないはずよ」

スカジャンのポケットで電子音が鳴った。掴み出したスマホの画面に通知が出ている。

キヴォトスでメジャーなチャットアプリ「モモトーク」の新着メッセージだ。

ゲスト用のショートメッセージで送られた内容は電話番号だった。

「お前の番号か?」

「監査役室の番号よ。零時まで待つわ」

険阻な目つきのネルにそう伝えてから、リオは伝票を手にしち去った。

3

ミレニアムタワーから一望できる夜景は普段と変わらない。

都市開発が今も続いている都心部は、夜闇を嫌うような明かりで飾り着けられている。巨大都市の華やかで美しいイルミネーション。ミレニアムの発展を象徴する輝きだ。

ネルは渋っ面でそれを眺めていた。

「ちっ……」

屋上の縁に座って夜風に吹かれる。この夜景を独占できるお気に入りの特等席だった。

ムカつくことがあったとしても、あの綺麗な輝きを眺めていればマシな気分になる。普段ならそれで気分転換ができた。だが、今夜は違った。

——『私に協力するか、矯正局に入るか。貴女の選択肢は二つよ』

ダイナールの一件が頭から離れない。リオの突きつけた選択が脳裏にちらつく。

時間が経つごとに苛立ちは増すばかりだ。

「うがぁーっ！ クソッ、あいつふざけんなよっ！」

冷静に考えてみると全てのタイミングが良すぎる。事務所の戦闘後を見計らったようにヴァルキューレが介入してきた。襲撃を予期して待機していたような強行突入である。

そして、ヴァルキューレとの衝突寸前でリオが都合よく現われた。

手のひらでいつから転がされていたのか？ 頭をいくら捻ったところで答えは出ない。

彼女にまんまとはめられた。認めるのは癪だが、手元に残った事実はそれだけだ。

眉根を寄せたネルは、リオのポーカーフェイスを思い出して呟く。

「けっ、絶対^{ダチ}に友達^チいないだろ。あいつ……」

自分のことは棚に上げて、精一杯の負け惜しみを口にする。当然ながら聞いている者は一人としていない。負け犬の遠吠え。頭に浮かんだその言葉で余計に虚しくなった。

溜息が独りでにこぼれる。

「はぁ……みっともねえ……」

どうしてこうなったのか？ 思い起こしてみるといつもそうだ。

どこに行っても喧嘩ばかりしている。自分から理由もなく喧嘩を仕掛けたことは一度も

なかった。相手から吹っかけられた下らない喧嘩ばかり。昔から常にそうだった。

リオに言われるまでもない。短気な性格や気性の荒さは自覚している。

「売られた喧嘩で負けるとか癪じゃねえか。あたしの性に合わねえんだよ」

勝利するから価値がある。命を懸ける意味がある。どんな戦いでもそれは変わらない。

だが、虚しさがいつも付きまとう。手のひらで掬った水と同じだ。幾多の勝利を重ねても

手中には何も残らない。孤独感が和らぐこともなく、周囲の誤解は深まるばかりだ。

リオの一言が苛立つ心の片隅でずっと引っかかっている。

——『ネル、貴女には力がある。力ある者は相応の責任を負うべきよ』

聞いたときは腹が立った。何も知らないくせに綺麗事をぬかすなと思った。

頭の冷えてきた今は理解できる。外見や言動に囚われることなく、リオは相手の本質と能力を見極めていた。つまり、彼女は相手を理解しようと最大限の努力をしている。

だからこそ、彼女は力に対する責任を持つべきだと告げたのだ。

「……相応の責任ね」

頭上の星空を見つめた。今日まで考えたこともなかった。喧嘩を売ってくるバカを殴り

倒すほかに使い道はないと思い込んでいた。だが、目の前にもう一つの道がある。

この能力が役に立つかもしれない。誰かを救う力となるかもしれない。

「あいつもデカい責任を背負ってんだな」

連続失踪事件を真剣に解決したい。リオの話からそれはよくわかった。

立身出世のためでも、立場による義務感でもない。この学園と頼ってきた仲間のために行動を起こしている。自分が憎まれ役になるとしても、合理的な最善策なら躊躇わない。

彼女の双眸を睨んだとき、信念と呼ぶべき強い意思が瞳の奥にあった。

「ま、どっちにしろ選択肢は一つしかねえな」

ヴァルキューレの面倒な取調べを受けて矯正局の独房に入るつもりはない。事件解決に協力すれば、事務所の襲撃を含めて諸々の罪は帳消しだ。手を貸す理由は他にもある。

ゆっくりと立ち上がる。スカジャンの右ポケットからスマホを出した。

「仕方ねえな。お前の話に乗ってやるよ」

この能力を面と向かって認めてくれた相手は初めてだった。やり方は気に食わないが、腫れ物扱いしてくる連中よりはマシだ。だから、彼女を信じてみようと思った。

教えられた電話番号に掛ける。きっかり三コールで繋がった。

『監査役室よ』

「よお、あたしだ」

『私の計算よりも遅かったわね』

「文句あんのか？」

『三十秒前よ。答えは出たのかしら？』

ネルはニヤリと不敵に笑んだ。

「決まってるんだろ。お前に協力してやるよ」

C&C MISSION REPORT



始動：The First Ignition

Mission Report 2

【協力者】

「まったく、こんなところにあんのかよ。無駄に歩き回らせやがって……」

翌日の午後だった。スカジャンのポケットに手を入れて、昼休みで賑わっている校内を手当たり次第に探し回った末、ネルは指定された行き先へと辿り着いた。

自動ドアに〈監査役室〉と銀色のルームプレートが付いている。

監査役はセミナーの中で最も知名度が低い役員だ。

部活の予算を管理する会計、ミレニウム製品の特許関連を扱っている書記と比較して、一般生徒と関わる場面は圧倒的に少ない。執務室の場所を知る生徒も極めて少数だ。

部屋の割り当てがさらに拍車をかけていた。ミレニウムタワーの中階層、資料室の並ぶ廊下の最奥である。普通に探しても見つからないような場所をあてがわれているのだ。

右壁の認証端末に手をかざし、スライド式の自動ドアを潜った。

「おいこら、リオ！ ちゃんと場所くらい教えろ……よ？」

思わずびたりと足を止める。雑多に散らかる室内に別人がいた。

長身の少女が毛ばたきで掃除をしている。背中越しに鼻歌を口ずさむ。

「るるるるるん♪」

ミルクブロンドのロングヘアを揺らして本棚の埃を払う。グラビアモデルも羨むようなプロポーションの少女はメイド服を着ていた。後ろ腰に大きな白いリボン。エプロンからミニスカートの裾、頭のカチューシャに至るまで、フリルやレースの装飾がある。

（何かの罰ゲームじゃ……ねえよな？ あいつに弱みを握られてんのか？）

わずかに同情を覚えながら声をかけた。

「なあ、ちょっといいか？」

「はい」

少女がくると振り返る。キュッとくびれた細いウエストとは裏腹に、豊かなバストで服の胸元がはち切れそうだった。何となく既視感^{デジャヴ}がある。どこかで覚えがあった。

切れ長な水色の瞳を丸くしたのは一瞬で、ぱあっと表情を明るくさせる。

「ネルちゃんだ！ 待ってたよ！」

「ああ!？」

同情は一瞬で消え失せ、額に青筋を立てたネルが睨めた。威勢の良い不良すら息を呑む眼光を浴びてなお、当人は意に介した様子もなく、屈託のない笑顔で近づいて来る。

「ふふつ、やっと話せた！ 教室でいっつも見てたよ！」

「教室？ お前も一緒のクラスか？」

「あれっ？ 知らなかったの？」

無邪気にじゃれつく姿は人懐っこい大型犬を彷彿とさせる。興味津々といった面持ちでネルにまとわりつく。背後へと回った少女が、ネルの両脇を支えて抱き上げた。

「お、おい！ 何しやがる！」

「わあー、本当にちっちゃいね！ 可愛い！」

「誰がチビだこらッ！ ぶっ殺すぞ！」

「抱っこのほうがよかった？」

「ふざけんなッ!! くっそ、離れろこの！」

少女の両腕を振りほどこうと暴れるも、ジタバタと手足は宙を掻くだけで効果がない。二十センチ強の身長差を踏まえると、どちらが優位かは火を見るより明らかだ。

ネルは全身を小刻みに震わせて吠える。

「うがぁーっ！ いい加減にしろバカ！ 離しやがれ！」

「わっ」

両足を勢いよく真後ろに蹴り上げて、少女の怯んだ隙を狙って逃れる。半歩後ろに退いてから、ネルは真っ赤な顔で怒鳴った。

「ふざけた真似しやがって！ 誰か知らねえが覚悟できてんだろぅなあ！」

「アスナだよ！ よろしく！」

「ああ？ アスナ？」

二ヶ月前の記憶が脳裏でフラッシュバックした。

入学式から一週間あまり。クラスの大半に避けられる一方で、わざわざ声をかけてくるヤツがいた。周囲の反応を無視して「一緒にお昼食べよ！」と誘ってきた物好きだ。

「……一之瀬アスナだったか？ あたしを昼飯に誘ったよな？」

「覚えててくれたの？ わーい、嬉しい！」

「おい待てっ！ ひつつくな！」

ぴょんと抱きついてくるアスナの両腕を寸前でかわした。

つくづく調子が狂う相手だ。天真爛漫や自由奔放と言うべきか。己の気持ちを優先するタイプらしく行動に予測がつかない。正直、悪意を向けられるよりも厄介だった。

「リオは？ どこ行ったんだよ」

「んー、コンビニかな？ お昼ご飯買ってくるって言ってたよ」

「そんで？ お前は何かやってんだ？」

「お掃除だよ？」

「……理由を聞いてんだよ。バカにしてんのか？」

「理由？　たくさん散らかってるでしょ？」

印刷した紙の資料が積まれたシステムデスク。ペットボトルや空き缶、コンビニ弁当のカラの容器が応接セットのテーブルにそのまま放置されていた。分厚いファイルを並べた壁際の本棚近くやドアの脇にまで、パンパンに膨らんだゴミ袋が何個も置いてある。

ネルは露骨に顔を顰めた。

「汚ねえなあ。ゴミ屋敷かよ」

「やっぱりそう思うよね？　だからお掃除してたの！」

「あいつにやらせりゃいいだろ。てか、何でメイド服なんだよ？」

「この格好だと動きやすいよ！　見て見て！　装飾も凝ってて可愛いでしょ？」

舞うように回ってみせるアスナ。その楽しそうな表情を見た限りでは、弱みを握られて仕方なく着ているとは思えない。となると、自分の意思で着ているのだろうか？

「お前も呼ばれたのか？」

「そうだよ、リオさんに頼まれたの！」

そう答えてから、アスナは不満そうに唇を尖らせる。

「ねえねえ、私ばかり答えてるよね？　交代しよ、交代！　私も質問したい！」

「うっせえなあ。なんだよ？」

「そのちっちゃいスカジャンってどこで売ってるの？」

「ああ!? ぶっ飛ばされてえのかしら！」

「ネルちゃんのサイズだと……子供服売り場？」

「……ははっ、良い度胸してんなあ。あたしをコケにして楽しいか？」

引き攣った笑顔で拳を固める。ぶちっと堪忍袋の緒が切れた。

「ぶっ殺すッ!!」

ダンッ! 床を蹴りつけて瞬時に肉薄した。ほぼノータイムで右のストレートを打つ。

プロボクサーも顔負けの神速だ。威力も半端ではない。この初撃で大半が絶入する。

アスナは右にひょいと身を引く。ネルの拳が虚しく空を切った。

「クソッ、舐めんな！」

驚きを覚えながらも止まらない。間髪を入れずに左拳で追撃をかけた。アスナはすっと半歩後ろに下がって難なくかわすと、弾丸じみた速さの連続パンチも難なく避ける。

「あはっ、こっちだよ？」

「調子に乗ってんじゃねえぞ！」

跳び上がって回し蹴りを素早く放つ。右足が鞭のごとくしなって空気を裂いた。

アスナは上体を反らしてやり過ぐすと、着地からの足払いすらも回避する。

「ふふっ、噂通りだね！ すっごく強いって聞いて興味があったの！」

彼女の浮かべる無邪気な笑みが、ネルの闘争心に火をつけた。

「お前もやるじゃねえか！ 褒めてやるよ！」

「本当っ!? えへへっ！」

「だから本気でやってやる！」

打突の鋭さが一気に増した。応接セットの外側を半周しつつ追い込む。左ジャブからの右フックを流れるように打つもかわされた。右足の突き蹴りをすかさず叩き込んだ。

「ふふっ！ 全然当たらないよ！」

アスナは身体を左に逸らして爪先を避ける。ソファアの背もたれに当たる寸前だった。読み通りだ。勝負はついた。

「こいつで終わりだ！」

右足を軸に素早い蹴りを打つ。左上段の回し蹴りだ。ヒュッ！ 鋭い音を残した左足が確かな感触を捉える。身長差は二十センチ強。痛烈な一撃が入るなら右の脇腹だ。

ネルは両眼を見張った。

「んだとっ!？」

もふもふの物体が宙を舞う。アスナの持っていた毛ばたきだ。左足が蹴り飛ばしたのは彼女の脇腹ではない。アスナが不意に動かしてしまった右手の毛ばたきであった。

アスナも鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。

「あれ？ 飛んでちゃった？」

「信じらんねえ、おかしいだろうがよ!？」

「うーん、何でだろうね？ あはは……」

困ったように笑うアスナに対し、ネルは口端をヒクつかせる。

「ふざけんな！ 今度こそ終わらせてやる!」

間合いを詰めようと飛び出した直後であった。

「うおっ!？」

何かが脛に引つかかる。左壁のコンセントに差された延長タップ。両足を配線の弛みにすくわれてバランスが崩れた。目を丸くしたアスナの横を勢い余って通過する。

「んがっ!？」

受け身を取る間もなく、ドアの脇に積まれたゴミ袋の山へと顔からダイブした。

ピクピクと手足を痙攣させたネルを、アスナは心配そうに覗き込む。

「ネルちゃん？ 大丈夫?」

「だから……ちゃん付けすんなっ!!」

ガバツと顔を起こしたタイミングで自動ドアが開く。コンビニの袋を提げたりオと目が合った。二人を交互に見比べてから、彼女は困惑と呆れの入り混じる顔で呟いた。

「……理解できないわ」

2

二十分後。ゴミ捨てから戻るやいなや、ネルは苛立ちを吐き捨てた。

「くそっ、あたしは二度とやらねえからな! 次は自分で掃除しやがれ!」

どかっと思革張りのソファに座って胡座をかく。何度もまとわりついてくるアスナに根負けした結果、掃除を手伝って室内のゴミを綺麗さっぱり片づけるはめとなった。

「お疲れさま! うん、綺麗になったね!」

アスナはテーブルを挟んで右側のソファに腰かけていた。ネルと触れ合うのに一旦は満足したのか、ペットボトルの紅茶に口をつけ、空いた手でスマホの画面を操作する。

二人に部屋を掃除させた当人は昼食を摂っていた。

「ありがとう、助かるわ。後でまとめて片づけるつもりだったのよ」

ティッシュで口元を拭い、何食わぬ顔で言い添えるリオ。から揚げ弁当の空いた容器をデスクの左端に寄せる姿を目撃したネルは、疑念を湛えた眼差しで鼻を鳴らした。

「よく言うぜ。今度は手伝わねえぞ」

「ダスト・シュートを後で施工するわ。ゴミ捨ての手間が省けて合理的よ」

「普通に掃除しろバカ！」

ネルのツツコミを無視して、リオはデスク上で両手を組む。

「さて、お互いの自己紹介は済んでいるようね」

「一応な。こいつは何だよ？」

怪訝な顔で指を差されたアスナが、むすつと頬を膨らませる。

「こいつじゃないよ、アスナって呼んで！ ネルちゃん！」

「だあーかあーらあっ！ ちゃん付けで呼ぶな！ ぶっ殺すぞ！」

リオがさらりと伝えた。

「アスナも協力者よ」

「はあ？ あたしだけじゃねえのかよ」

「協力者が一人とは言っていないわ。冷静に考えてみなさい。貴女は強いけれど一人だけで対応できる範囲には限りがあるでしょう？ 不測の事態も考えておく必要があるわ」

「そりゃまあ、そうだけだよ」

「信頼できる人手は多いほうが良いはずよ。違うかしら？」

「……わーったよ」

反論の余地がない正論だった。少数精鋭の人材に絞りながらも、イレギュラーな事態の備えも考慮に入れておく。セミナーの役員にスカウトされる才覚は伊達ではない。

リオはデスクのディスプレイスタンドを回転させた。

「捜査方針を説明するわ。情報共有を兼ねているからよく聞きなさい」

「おい、あたしをリーダーにしろ。お前の話を聞くのはそれからだ」

「理由は？」

リオは腕組みしたネルに視線を投げる。

「あたしは命令されんのが性に合わねえからな。お前の捜査には協力してやるよ。けどな、現場のやり方に口出しすんな。あたしの判断でやる。実戦があるならなおさらだ」

数秒ほど黙考したのち、リオは納得した様子で合意した。

「……そうね、貴女の言い分にも一理あるわ。エージェントを独立チームで運用するなら、現場で判断できるリーダーが必要ね。アスナ、貴女もそれで良いかしら？」

「オッケーだよ。問題なし！」

ネルが手のひらに拳を打ちつける。

「うっし、決まりだ！ アスナ！」

きよとんとするアスナの顔をビシッと指差した。

「あたしをリーダーと呼べ！ いいな？」

「はーい！ これからはそう呼ぶね！」

「……本当にわかってんのか？ まあいいけどよ」

「そろそろ本題に入りたいのだけど……」

「おう。遮って悪かったな」

リオが気を取り直して説明を始めた。

「結論から伝えるわ。現状、行方不明者の情報に繋がる手掛かりはゼロ。完全に手詰まりの状態と言わなきゃね。居場所どころか生きているかも現時点ではわからないわ」

「それじゃ、お手上げじゃねーかよ」

「そうでもないわ。セミナーの管理口座に流入する大金の話覚えてるかしら？」

「あー……誰かが失踪する前に振り込まれるとか言ってたアレか？」

「被害者の失踪前日に振り込まれる謎の大金よ。今のところ唯一の共通点ね。管理口座の取引履歴を調べただけけど、ある大手の投資会社が取引の入金元になっていたわ」

リオがキーボードを右手で操作する。企業のオフィシャルサイトが画面に映った。

「——オクトパス・キャピタル・パートナーズ。キヴォトスで最も知られている業界屈指の大手ファンドよ。オクトパスファンドの通称が有名ね」

キヴォトスの財界でオクトパスファンドを知らない者はいない。

同業他社や投資家、経営者は言わずもがな、各学園の生徒会にすら広く知れ渡っている。

潤沢な資金を背景に市場を動かす手法から「相場の巨人」と呼ぶ者が多かった。

オクトパスファンドの影響力は大きい。キヴォトスの中央行政を担う“連邦生徒会”の政策決定すらも、同社の発言や動向によって左右されると囁かれるほどだ。

ミレニアムも当然ながら例外ではない。オクトパスファンドとは大いに関係がある。

リオは画面にグラフ入りの資料を映した。

「私達も出資を受けているの。校舎の設備投資や維持費に使われているわね」

「そーなの？ どれくらいの金額？」

「およそ三十兆よ」

アスナが目点を点にする。ネルもあんぐりと口を開けた。

現実離れた数字に二人が固まる一方、リオは平然とした顔で首を傾げる。

「年間予算の一パーセント以下よ。そんなに驚くような金額かしら？」

「お、おう……」

「ミレニアムの財政は外部出資に依存するほど深刻ではないわ。年間予算の大半を部費に割り当てる都合上、学園全体の運営費は外部の出資金で一部を補っているのよ」

「なら、たまたま振込日が被ったんじゃないの？」

「合わないのよ」

「あん？ 何がだ？」

「出資金よ。提供された出資金に返済義務は原則ないわ。とはいえ、多額の出資を受けると出資者の影響を強く受けるものよ。学園運営を乗っ取られる恐れもあるわね」

「マジかよ？」

「だから、セミナーで各社から受ける出資額を毎年決めているの。オクトパスファンドの入金額を合算すると、今期の決められた額を五十億もオーバーしているわ。これだけでも疑うには十分すぎる内容よ。振り込まれた資金の流れにも不審な点が多いわね」

軽快にキーボードを叩き、びっしりと数字の並ぶデータを見せた。

「私が調査した資金の流れよ。オクトパスファンドの資金は、複数の部活口座へ自動的に分配されているわ。帳簿の下から五行目を見てちょうだい」

ネルとアスナが目凝らして画面を覗き込む。

「めんどくせえなあ……」

「うーん……頭がくらくらしてきたかも？」

リオが小さな溜息をつく。液晶ディスプレイを自分の正面に戻した。

「簡単に説明するわ。複数の部活口座に分配された出資金は、保安部の口座へと最終的に流れつくの。各部活から請けた業務の依頼料として振り込まれているようね」

「その話のどこが怪しいんだよ」

「依頼元が一つも存在しないと言えはわかるかしら？」

「……は？ 存在しない？」

「依頼元はすべて虚偽部活よ。分配先を調査したの。廃部や解散した部活もあったけれど、設立届に記載された場所に部室は一つも存在しなかったわ」

所属する部員もなく、活動実態もない部活を「虚偽部活」と呼ぶ。廃部届を出し忘れて登録書類に残るケースが多いものの、予算確保の目的で作られる事例も少なくない。

現状、部室を用意できるなら部長一人でも設立は受理される。

この設立要件の抜け穴を突いたスキームが、部長一人で虚偽部活を複数作って兼部するやり方だ。活動実態のない部活の兼部で予算を多重に確保する脱法行為である。

リオは両目を細めた。

「架空取引を使った裏金作りね。保安部の収支報告書にも載ってないわ」

「口座に金が入ってんなら記録が残るだろ」

「虚偽部活からの送金は、学園の会計システムに未登録の別口座へ自動で振り替えられる仕組みよ。入金記録を辿って見つけたけれど、保安部で表向きは登録されてないわ」

「どういうことだよ？」

「保安部は企業との直接取引を禁止されているのよ。でも、セミナーや部活との取引なら許可されているの。つまり、虚偽部活に出資金を分散させてから報酬の名目で支払うなら、外部との間接取引ができる。別口座に振り替えたら監査でも引つかからないわ」

理解がようやく追いついたのか、アスナは驚いた顔で尋ねる。

「えっ、保安部が犯人なの!？」

「組織ぐるみと決まったわけではないわ」

「金を受け取ってるんだぜ？ クロで間違いないえだろ」

「組織ぐるみの犯行を否定できないのは確かね。でも、こんな事件を起こした目的と手口、誰が関与しているのかも不明よ。資金の流れをもっと詳しく追跡するしかないわ」

欠伸をかみ殺したネルは、リオに視線を投げた。

「結局、あたしらは何をやってたらいんだ？」

「潜入捜査よ。オクトパスファンドの社内に潜り込んで調べてもらうわ」

「はあ!? どうやって潜り込むんだよ! 簡単に言いやがって!」

「心配ないわ」

ディスプレイを回して二人に画面を見せた。

「オクトパスファンドの社長が専属ボディガードを募集しているの。私が推薦状を添えて応募しておくわ。先方から連絡がきたら面接に行きなさい。採用されたら潜入開始よ」

「ボディガードか。んじゃ、余裕だな」

「潜入ミッションだね! すっごく面白そう!」

ワクワクした様子で笑うアスナ。ネルは膝を軽く叩いて立ち上がる。

「さあて、さっさと片づけちまおうぜ」

「その格好ではダメよ。アスナ、準備をお願いできるかしら?」

「はーい、私に任せて!」

「準備い? いったい何のだよ?」

「ふふっ、それはね……」

アスナは首を傾げるネルの両肩に手をおいた。

「おめかしだよ!」

すれ違う生徒から好奇の目を向けられつつ、最寄りの更衣室に移動してしばらく。

「クソ、何でこんな服を……」

ネルは盛大な溜息をつく。ドレッサーの鏡にげんなりした顔が映っていた。

五分ほど前だ。訳が分からないまま連れて来られ、リオに「貴女のよ」と手渡されたのはメイド服だった。コンセプトは同じなのか、アスナの一着とデザインが一致していた。

おかげでボディラインの落差が残酷なほどよくわかる。後ろに立つアスナと見比べると圧倒的に負けている。張り合う気もないが、不条理な現実からは目を逸らすことにした。アスナが楽しそうに笑顔を浮かべる。ヘアブラシでネルの髪を梳いた。

「うん、いいねいいね！ すっごく似合ってる！」

素直に褒められて悪い気はしない。ネルは満更でもない様子で頬を緩める。

「……そうか？ ま、まあそれなら別にいいけどよ！」

「とっても可愛い！ これでお揃いだね！」

「ちょっと待てこら！ バカにしてんのか!？」

「んー、他にも着せてみたいなう……ナース服とか、バニースーツとか！」

「着るわけねえだろ！ ふざけんな！」

スカジャンとお気に入りの赤いスニーカーは死守したが、他は頭上のカチューシャからミニスカートの裾に至るまで、フリルの飾りがあしらわれていた。見かけの装飾に反して瀟洒^{しょうしゃ}にまとまっているのは意外と言うべきか。コスプレ衣装のような安っぽさがない。

実用的な制服といった印象を受ける一方、普段着にしたいとは思えなかった。

ネルは鏡に映ったリオを睨む。

「おい！ あたしが何でこんな格好しなきゃならねえんだ！」

彼女は壁を背にして立っている。タブレット端末を操作する手を止めた。

「募集要項に書かれているのよ」

「はあ？ ボディガードの募集だろ？」

「私を疑うなら確認してちょうだい」

ドレッサーに歩み寄ってから、ネルにタブレットを差し出した。オフィシャルサイトを指先でスクロールしながら、ボディガードの求人内容と募集要項をチェックする。

「へえ、給与とか待遇は悪くねーな」

「補足事項を読んでみなさい」

「そんなのあったか？」

「一番下のページよ。拡大するといいわ」

リオの助言に従って表示倍率を最大で内容を読む。

——ボディガードの業務に加えて、社長室のメイドとして必要な業務に別途従事する。経験者優遇、制服の貸与なし。試用期間有り（六ヶ月）、労働条件は別途に定める。

「なあ、ここだけ文字がちっさくねえか？」

「不利な条件や重要な内容をあえて小さな文字で書いてある契約書と同じよ。試用期間の記載を隠すためでしょうね。労働条件が恐らく違うのではないかしら？」

ほとほと嫌そうな顔でネルは両肩を落とした。

「じゃあ、この格好で潜入しなきゃならねえのかよ。しまらねえなあ……」

「我慢しなさい。囚人服よりは良いでしょう？」

「ちっ……覚えとけよ」

アスナに聞かれないよう耳元で囁いてから、リオはタブレットを回収する。

「エンジニア部の特注品よ。オーダーメイド機能性に問題はないわ」

「はあ……わざわざ作らせたのかよ」

「推薦状を添えると言ったでしょう？ 部活の設立届が二分前に受理されたわ。貴女達は

学園公認のメイド部よ。ミレニウム専用のメイド服があっても当然ではないかしら？」

「メイド服のほうが先に作られてんじゃねーか！ 順番が逆だろ普通！」

「ちなみに部長は貴女よ。上手くやってちょうだい。頼んだわ」

「はあ!? ちょっと待ておい！」

一方的に話を切り上げると、リオは更衣室から足早に出て行く。

アスナがドレッサーの台にブラシを置いた。

「あとはお化粧かな」

「ああ？ 化粧なんか別にいらねえよ」

アスナは目を丸くする。

「もしかして、リーダーって……お化粧したことない？」

「何だよ？ 悪いか？」

「えーっ、もったいないよ！ 私が教えてあげる！」

監査役室から一緒に運んだ自分のスクールバックを開けて、次々と取り出した化粧品を鏡の前に並べていく。スキンケアからメイクアップまで一通りの種類が揃っていた。

「リーダー、お待たせ！ お化粧したらもっと可愛くなるよ！」

メイクブラシとファンデーションのケースを手にも朗らかな笑みを見せた。



ネルが口端をヒクつかせる。握り拳を作って羞恥心を堪えた。

「お前なあ……」

「ふふっ、心配しないで！ 私がちゃんと教えるから！」

「だ・か・らっ！ お前は人の話を聞けよ！」

本編へと続く

C&C MISSION REPORT

— 始動 : The First Ignition —

【発行日】

2026 年 8 月 15 日 初版発行

【発行者】

黒ねこ作（黒猫機関）

Email : projectblackcat2011@gmail.com

Twitter : (@gretelproject) pixiv ID: (13552389)

【イラスト】

桜庭友紀

Twitter : (@kyomoneko_2) pixiv ID: (2958)

【装丁デザイン】

船木渡（FLOSHIKI DESIGN）

<https://flosniki.com>

【印刷・製本】

株式会社甲辰社 ツクヨミ

<https://www.tsuku-yomi.com>

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製（コピー）することを禁止します。また、本作品は二次創作フィクションであり、実在する個人、団体、歴史、原作とは一切関係ありません。